月日は百代の過客にして行
かふ年も又旅人也舟の上に生涯
を浮べ馬の口とらへて老を
むかふる者は日々旅にして旅を住
古人も多く旅に死せるかな
予もいづれの年より片雲の風に
さそはれて漂白の思ひやまず
海浜にさすらへ三年の秋江上の

破屋に蜘の古巣をはらひて
やゝ年も暮春立る霞の空に
白川の関こえんとそゞろ神の物に
つきて心をくるはせ道祖神のまね
きにあひて取もの手につかず
もゝ引の破をつゞり笠の緒付かえて三里
に灸すゆるより松島の月先心に
かゝりて住る方は人に譲り杉風か

別墅に移るに
草の戸も住替る代ぞひなの家
面八句を庵の柱に懸置弥生も
末の七日明ぼのゝ空朧々として月は
在明にて光おさまれる物から
不二の峰幽にみえて上野谷中の
花の梢又いつかはと心ぼそしむつま
しきかぎりは宵よりつどひて舟に

舟に乗て送る千じゆと云所にて船
をあがれば前途三千里のおもひ
胸にふさがりて幻のちまたに離
別の泪をそゝぐ

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なを
すゝまず人々は途中に立ならび
て後かげのみゆるまではと見送なるべし

ことし元禄二とせにや奥羽長途
の行脚只かりそめに思ひたちて
呉天に白髪の恨を重ぬといへ共
耳にふれていまだめに見ぬさかひ
若生て帰らばと定なき頼の末
をかけ其日漸早加と云宿にたど
り着にけり痩骨の肩にかゝれる
物先くるしむ只身すがらにと

まことに信しを修するものは悪の
障を除き雨露を筆のあとにも
行ふはまことに備へとなすれは
さすれば捨てゝ後世の都を
あらはすには及はれ
宝の六識を備ふ同行富士白山
神は末の世のためやかの神にて
富士一禅也無戸室に入て焼かぬ

ちはやふるのみ神は火に生れしのみこと
生れましより宝の六根とかへ
給ふと後なし信し此の法也将
この三諸といふ霊と核子縁記
の書せり仏法も信し
此日光山の核子を御すゝめしの
ことなるやうは気名と仏五おつとも
あるは血を首とする人のかは

侍まゝ一夜の草の枕も打とけて
休み給へと云いかなる仏の濁世塵土に
示現してかゝる桑門の乞食順礼
ごときの人をたすけ給ふにやと
あるじのなす事に心をとゞめて
みるに唯無智無分別にして正
直偏固の者也剛毅木訥の仁に
ちかきたぐひ気稟の清質尤

尊ふへし

卯月朔日御山に詣拝す往昔
此御山を二荒山と書しを空海
大師開基の時日光と改給ふ千
歳未来をさとり給ふにや今此
御光一天にかゝやきて恩沢八荒
にあふれ四民安堵の栖穏なり
猶憚多くて筆をさし置ぬ

ゆかしく青葉若葉のみどりの更
生繁らんと成ゆかんとき
なし
刈捨てゝ又繁るらし夏　芝良
雲らは淡の念氏しくし 愚(?)かな(?)
芭蕉の下葉を見(?)とろへて(?)
薪水労をさ(?)とめ(?)こゝろ(?)
私しき家深の眺共にきえ事を

頃日は羇旅の翁をいさなひけんと
旅之暁をわすれて世をのがれ
をこし無(?)五をなして家悟と
仍て我かれらの白をまなびて
実力なくて(?)ならぬ
花(?)餘て心を定めて浮世の
頂より瀧流して夏(?)の庵(?)の
岩(?)淨より石座に身を

ひろあつて滝の裏よりながれ
うみの瀧とゝ付く也
時時は流るゝやうなれども夏の初
水頃の雨なれとも不絶人の
もちなれとも歩行を
ひろくまたくみとゝなして
りゝ雨降日ぞろれ農夫の
よ一和らりて用れいと祈り
ま
りうこくゝ所的のふあり
るまりあつくゝらしたれ弥吏
といいもさてくは地
いうもへさわこれも此砂横
よわれていうるく夫人うと
ふゝ者うんあやまり伏ふる
のくゝまる所くくらとんーと
ゝ仕なちいさき者のうま

跡したひてはしる独ハ小姫にて
名をかさねと云きゝなれぬ名の
やさしかりけれハ
かさねとハ八重撫子の名成へし　曾良
頓て人里に至れハあたひを鞍
つほに結付て馬を返しぬ
黒羽の館代浄坊寺何某の方
に音信る思ひかけぬあるしの悦ひ

日夜語つゝけて其弟桃翠なと云か
朝夕勤とふらひ自の家にも
伴ひて親属の方にもまね
かれ日をふるまゝにひとひ郊外に
逍遥して犬追物の跡を一見し
那須の篠原をわけて玉藻の前の
古墳をとふそれより八幡宮に詣
与市扇の的を射し時別しては

我国氏神正八まんとちかひしも
此神社にて侍と聞ば感應殊
しきりに覚えらる暮れば桃翠
宅に帰る
修験光明寺と云有そこにまねかれ
て行者堂を拝す
夏山に足駄を拝む首途哉
当国雲岸寺のおくに仏頂和尚

山居跡あり
竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば
と松の炭して岩に書付侍りと
いつぞや聞え侍る其跡みんと雲岸
寺に杖を曳ば人々すゝんで共に
いざなひ若き人おほく道のほど
打さはぎておぼえず彼麓に到る

[illegible]

月のもと今[illegible]

橋もちりてとゞまりて

さてのたゞいつのちとやもの

[illegible]れば石上の小菴若

座[illegible]禪師の[illegible]

[illegible]石[illegible]

未咏もあやうきなまこ

とゝなりてあしたに[illegible]

[illegible]教せ石より鉢[illegible]

[illegible]ゝ此なのゝ[illegible]

[illegible]やゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

教さん八幡の[illegible]

石の毒気いまだほろびず蜂
蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほど
かさなり死す又清水ながるゝの
柳ハ芦野の里にありて田の畔
に残る此所の郡守戸部某の
此柳みせばやなど折〳〵にの給ひ
聞え給ふをいづくのほどにやと思ひ
しを今日此柳のかげにこそ

立より侍つれ

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重るまゝに白川
の関にかゝりて旅心定りぬいかで
都へと便求しも断也中にも
此関ハ三関の一にして風騒の人
心をとゞむ秋風を耳に残し
紅葉を俤にして青葉の梢

[illegible]れ也　卯の[illegible]のしぬ[illegible]ゑの
[illegible]の[illegible]
[illegible]古人[illegible]と[illegible]　[illegible]と
[illegible]　[illegible]の[illegible]
[illegible]
卯の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]城相馬三春の庄[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

断てくるくるいとぐちのくるくるとぐ
風流のあやあくるの山桜
さくらもさくらもさくらもさくらもさくら
咲きまさりてしくしこそうれし
此石の侍ふ大ふくろのごとく
とさかのごとくせとものいふを探ひ
うふさくもくやしく用ようそうれて
りのくさくさ　春雨

栗とゆふ人ぬぬ西の方にて
西方浄土ゆゆ夜ありとり哀愛
のごとくなりしたまたまいたりし
くるるや

世の人乃人ふるや村の家
等窮うつむくもし五里ゆ程度
の石と縁をてあきうを路より
色しゆあらはるるくるるし
をやもくるるハいつまのくるを

ふうてぼうと人々ながめ
ゐる所へ人うりにはるる人り
さいうちくくとうりあるきていん
とのぶくうりぬこをはりたく
きまして黒坂の大なる一見し
福坂へ行くあくれいこうりうる
のうたとあてしるのはまり
ちとうりにのゆ望ゆ石ゆ立たて

ひろ里の童アのあるてきなるる
昔ハせんのとよ行ことに有の人の
麦をあしてにたを試ゆと
くくみて世谷しつきうたハ石の
四ちさまちうつくしくくまてく
いくくくくくや
早苗くくゆはやすの根
月の海のうしとあてはのこと

元禄三年五月伊藤左四郎殿へ
たのまれ一ぢまへ参り候塚の
結跡をたづねくるしみたる
りしかもいもせ殿の細銭也林
又大なる人のなげくよりと
て問とゝくしみたるのたもと
つゆの石碑をあつめ中にも二人の
嫁なるらしとんぬもあはれ

うしくるさたなのせまんつるあ
るもとをしねの渓流の石碑
もまさきしめすうるはしく茶
をたへ家又に我行の太刀さき
う分くとくるく仕おきて
発七太刀をくゝ五月まうれ
五月雨のうつもとおぼつかなし
又温泉のあれ陽に入て行とう

まさに出崎を遠ざかりて南に
さし負ける舟しばらくはなれ
この先うけしに雁をとゞめ給ふ
引けるは又て雷震雨をまじへ
降てけりまたあるに金数寄
を待ちて眠れる其あとに一
乗りて清きすみ経蔵の
ことも堂しゆかしく又勝妙

行者の金剛心まことにありかたく
業報のほとけさまさるらむ
あまりうらみて、みな病を捨て
しかりて罪障消の行脚捨身
無常の観念道路にさまよひ
の余念もなく乎手御座ありて
路経桜より続きて伊豆の大床
ある日懺悔白石の海に

笠嶋の郡に入れハ藤中将実方
の塚ハいつくのほとならんと人にとへハ
是より遥右に見ゆる山際
の里をみのわ笠嶋と云道祖神
の社かた見の薄今にありと教ゆ
此比の五月雨に道いとあしく
身つかれ侍れハよそなから眺やりて
過るに蓑輪笠嶋も五月雨の折にふれ

のおもぬまりかと

笠嶋ハいつこさ月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそめさむる心地ハすれ
根ハ土際より二木にわかれて昔
の姿うしなはすとしらる先能因
法師思ひ出往昔むつのかみにて
下りし人此木を伐て名取川

の橋杭とまれるものなるべし

まことや松ハけしからぬ事なれ

ども作ハ体あるい松

徒ちて[illegible]ハ今将ハ嵐

のうちにのこりくくるまま

松のみ[illegible]行

武蔵の打みをとなりあと者

[illegible]ハ

柳青松ハ之あとと江川城と

入江川を隔て仕寄へあり

ぬ[illegible]ハ諸石をとりてなるい

遥負て[illegible]盡て如落つとゝあ

りあり卯心あり者とけて紀人

[illegible]この者[illegible]

[illegible]ところを考ふ行くとと

一日紫門ハ[illegible]城師の[illegible]

あしたて秋のうるはしき
ひかりを降つて国ハひろし
吹くる也日乗しらぬ花の姿
八て家と本のしたとき草
うく赤ゆしけきハこゝろ
こゝろきとハちみれ菊師業天神
のゆ紅ちとおてもちハれ花
拉海ゆうてのて書ちもれ送

思得の法おつけしれ草雑三
陽ちこれハ風流のしきあ
ゆきくもり雲吾夫をひ
あわめ井三之よ人茅の秋の秋
うの畫閑ゆまをて学ちりい
おくのあ春のゆら除ゆ十角の
芳ゆ今しゆ十角の菱花
を倒て閑ゆく献てちり

寒碑　市川村多賀城ノ右

下の石碑ハ高サ六尺餘横三尺餘

紀吉を守りて又字ハ也四維国

界之勅宣を受て此城神亀元

年按察使鎮守府将軍大野朝臣

東人之所置也天平宝字六年参

議東海道使同将軍

恵美朝臣猶従造而十二月朔日

と有聖武皇帝の御時と年号ハ

むしりとりしみ多のたけかく

流行よといへども高川落て

ひろ石ハ苔むしてあれ

ハ去て行方しらぬ世の

代多りて古法しるあす

のこと思ふもかなしき

歳の記念今眼おろす人の心

を問ふ　りおの一座　発句の
吹し蕭　旅の宿をあれて
問し　ふるさと地
これも　所四の川伊のうを　ある
末乃松山　ハさとを　末松山を　其
松のあひく　皆墓　ふるさとを
うり　松とつ　ある　おの　赤し
ハうくの　ふるさと　山しも　ゆり

塩ゝの　海ゝ　入ゝ　おのゝ　あとゝ　宵
あのゝ　ゝ　御ゝ　れて　夕月　夜遊
義ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
きつゝ　て　者ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
て　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
いゝ　ゝ　ゝ　也　其　東　国　言　伊　乃
琴　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　て　奥　ゝ　ゝ
りの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

もあまりひろく綱よりも
よりて枕ちうこうしたまふ
まくらもとの遺風とゝのふる事
ゝ神ゝ[illegible]
の御神ゝ俗國字真[illegible]
て宮柱ふとしく彩樣くしもわ
ゝ石の階の似ゝきり相日め
者のむかうをとゝやすらたの

果堂上の御[illegible]て神靈あらゝ
ゝ[illegible]
ゝ貴れ神ゝ[illegible]
ゝれのゝしの國ゝ文[illegible]
三帝奇進ゝ五[illegible]
今月の[illegible]
[illegible]渠八勇義忠孝の士也佳余
今ゝもりてゝ[illegible]

微人往道をとゝのへ初めとす
くまゝこゝよりそこゝとなり日統
午ゝゝゝ水をとりて松ゝゝ
其間二里除 雄伯の
柳ゝゝ松ゝ枝葉
一のぬれて花間を西湖を
東南海を
湖江の湖を

あゝて歌あり天を指ゆすり
を波ゝ甫間つゝ
之童ゝ
ある貫あり把ゝ
松の
汲間ゝ
そあゝゝ
ゝて美人の顔を

神のむかし大山すさのをのみこと
ましや造化の天立いつきの人の業
をあらひ汐とる蜑さま
雄浦の磯ハ地つゝて海をあら
浪也雲れ猟師のあま屋の泊
吟波石うつゝ将松の木陰
せゝとしぬ人し帰くゝ行かて
月海行くゝ手りふゝるもの

巻頭に侍しいるゝ人くゝ
ゝれまゝゝ山ゝ
ゝゝ月海ゝつゝて昼のゝ
又あゝゝむ江ゝ
ゝれハ窓をひゝ二階を仰て
風雲の中ゝ旅宿すゝて
夢やゝまゝて ゝゝ花ハせゝ
松浦や春ゝ月をれ

弓八日とちて眠んとしていね
らしてすでに夜をすごしは赤堂
松浦の行をしり安遍松うら
天竺の仏子を拾ひ伝をあつて
こしものなくこそ乃杉風湯より
参りあり
十一日湯出ちて治部ちこ十之
世の昔ちの千ぼ出ぶして

八月朔日の夜用ひて後
雲お禅師の伝化と伝て七堂
夢ひろて金壁の荘厳ひを辞
仏土成就の大伽藍とうたはる
彼見仏聖のちはいつもちくく
十三日平泉
おくの路うつ仏て人迄行
1雄花菊黄の往しうらく

[illegible]路山[illegible]
石の巻[illegible]
[illegible]
尾口[illegible]數百町迴流入浮[illegible]
山人家地[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]

小家[illegible]
[illegible]
尾崎[illegible]
[illegible]
[illegible]戸伊[illegible]
余里[illegible]
三代の[illegible]一瞬の中[illegible]

大門の沼八一里ばかりなり義衡
の沼八田野にして金鶏山あり
形ちとゝのひて美しく縮ゝのかたち
小山川南部にあり流れて大河也
衣川八和泉の城をめぐりて流れ
の下にて大河に落八康衡が
旧沼八衣の関を隔て南部や
をけし堅め夷をおさえんとの
ものなるべし

偖も義臣ども城に
こもりて功名一時の叢となる国破
れて山河あり城春にして草
もゝみどりとなるとは
つわものどもの夢の跡
哀なるや兵どもゝの夢の跡
卯のかしら四時ばかり白色なる
雲立て耳鼻をかすめ光りを二堂開帳

ず極楽六三將の像をとのゝ
光堂八之代の棺を納めこゝに
佛を安置す七宝まゝらくく
殊の麻風やまと金の粉を
雪と降て就顛廢之虚の叢
と成へきを四面彩り周て蔭も
を露て風雨と侵蝕に任せ
の仏会といふ事なし

五月雨の降のこりてや光堂

南門道なきやりて見くるの
宜と侍ら小こ侍りの山路を
登てみちのくの尿前の関
こゝにて出羽の国へ越
此路旅人稀なる故に
関もゝ大いなるをのゝりく

日飯蒔絵小封人の家をと
うけて会ふ所むこ口風流なれ
てしらみさかりて遠白しう
登乱らの扉するに花ちと
ひらのこゝもしより出羽のもり
大きをほして[illegible]
れいたゝへの人ゝ教て到へ
きしくきまりて人を

[illegible]小寂寞のうの者及根拾
をくゝくく櫻の枝を拾ひてゆく
先ゝこゝもりふるあるや
こゝゝやうもあへきりうれと
立きこゝなどゝほゝついて
りひらのゝふゝきゝ高山
森くゝして一島あるゝのの
下閣あるりあるりとし

雪ふる山のあらしに
落の中路ふく水とやりなる
上瀬て舟こつ行きて流
して宿に上のぼるかけうの
業にて夕のくもやり出ら
此不用のすきを思ふのをもて
まして仕合ふとおもふて
見れば行くてく行くらく
乃を也
尾張澤にて佳風と者とこに
ゆきを八ふるのふるさと志いや
しくも都しおくこしてさ
すすき旅の情をそ知れ小り山
こしかして毛金の山のこりさこと
りしらし行く
流すすと和やかーて和やかも

遠出よりいやうのひとの所
[illegible]を伴ひて石の形の
種間[illegible]人は代の[illegible]
山形傾くこと石ともとも[illegible]
並置大師の開基にて[illegible]法
開の池也一見すべきこと人と
のまゝにて[illegible]
[illegible]て共間[illegible]地

日いまゝ[illegible]
[illegible]て山上の[illegible]
歳を重て[illegible]杉柏[illegible]
土石[illegible]共潤[illegible]
麻を閉て[illegible]
[illegible]
佳景[illegible]
開[illegible]

富士川のほとりに大石田といふ所
四五町ばかりこなたに高野誠哉の屋
敷ありしが今はあれはてしのみ
にて庭の角つののみどやりかけ
ぬけたるまゝにて有しかば
遠くに寄てみるに
ちらへとまる人一人
なくこゝにおしたるこのもの
流

富士川のくだりは出て山沢
を取上まさしくさらさら
あるくこと拾数町の小
と流て日の海に入る右
富士川の中に拾とおぼ
しき所あり
白糸の滝は昔世の人の絶て

仏人著作し侍りしを[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月[illegible]羽黒山に[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳥の毛羽をはぎ国の貢ぎ献ず

風土記に行き来人月山に登る

なんて三山に富士武江東

叡山に属して天台山観の月明

らかなる国師離通の法の行ひ

ふかく僧坊様々に修験

行法を勵し霊地の演

効人貴賤ふかく敬崇奉られ

[illegible]

八日月山より木路あり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

無と補陽と枕して和て
陰と陽と相合して生ずる
湯波くるる
谷の待く鍛冶小屋とふるとも
滝の霊水と探て名づく潔斎
して釵を打ち刀と銘を切
て世に賞せらるる彼龍泉の剣
を淬と和す将莫邪のむかし
を
きょう道に拙の地のくるるね
ずをまれをりとく拙くなりて
をりやすきと人くるる
探のつくるぶかのりぬる
技雲のくるぼまして春をきれね
生ずるのものるりとまの
極はいるまりくるりくるる
傍正のきのえしいるよいて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

暑さ堪へがたき頃江戸を立て川
江戸の陸の風なんおもてをうつして
今宿にいたる方にて貴僧の際
ゆ雲北の方にうつる弘法と傳し
いさごうつみて世除十里ばかり
やかうつしに汐風吹上
雨滴瀧ちてうつる海のいろ
風やうく莫伽しく雨はみ奇せと

雨降の晴色又新面あらと皆
の笑ひ勝ちに勝ちなの性
さを多うの文化年間の茶
やうしに出る新宿に出
うふ人民間に歩いて
うつ悲歌が泊とあるに
岸に立ちとあるとと
ゆやかに桜の花咲所

の沿革をもて江戸より陸
路の神功后宮の浮墓と云ふ
と干満様ことなれども奇
あらしきいとまなきもいとも
中よりやせまりの方をなして
為ると称し風波一帆のかよ
ひまもなく海天をはるか
に隔てつゝ江のあり西ハ武州
の開港をもて東ハ況を築て
世界をなし海北をよ
くなしたりとも
江の延袤一里ゆ伊勢修
ゝまいて又異なるかたちの
如く象潟ハ多くの
ほとゝぎすみとくくて地獄堤
をみやとくくて

象潟や雨に西施がねむの花

汐干潟影かたぶけて月の出

みちのくの奥ゆかしさを見て又涼

象潟や桜咲かりし波の上　芭蕉

蜑の苫屋やかすかに月の浦風

岩こすの鶴

波こえぬ浦人ありとやみさごの巣　芭蕉

酒田の舟渡りを越て北陸道の

雲らく迄送るの別れ惜しむ

ものしらく加賀の府にて石枕

と使ふ気の関こそ思ひ出られ

の地と聞きて海士

思ひ入る山の奥にも尋ね

岩間の清水

あるじにて下

五月雨六月の雲は空
荒海佐渡に横たふ天の
川
今日は新しき月の出
初めしごとく北国一の雄峯を
出でつれば松引きて
雲はるゝ一間ばかり西の方
みさきの人生きさらぬ
長老のまゝ来て
あはれ
ほとゝぎす
ほとゝぎの声は新
まゝて此関
なすはたつ
なのさのくの世をあさましう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

也川を渡りて那古と所と
生捷流の者ども奉るものも
如此のことあるべきものとて
人々忘れられ五畿いう
伊勢へ参りて山の谷なる
墓のせいめいなる墓
の一枚の石にありあるべきと
いひたてられてこの国へ入
せの香取へ右ちかあり
千のうちくりしり谷をして
今は八七月中の五日に宮
大坂ありて高人伊度と者
ちちはしら物ちをもて
一笑をこたりの八せ分
ふのくすせ紙をなり
ふちをのなて

長兄遠いなりを保ち
城も御門も永法寺の風
ちりぢりに
秋深し多賀の山の紅葉
逢中吟
いつしかと日の入前の風
少れくるる
とりしきるあわれ吹

[illegible]

[illegible]

[illegible]

温泉に浴す其功右に述べ
た
山中や菊はたおるとなほ白
髪
いとけなき童したれの文詠諸を
好き給の貞室つるぶのむし
つるまりに明暮ぶ
られて浴て貞室の只
とゝ
ろ
に
て
せ
ま
る
功名の
只一村判付と語て
こ今こ又むし
蕎麦に暇ぶ有て保養の
間も無ともこゝ
先立てり
りくてせ
ところ

[illegible]

[illegible]

今日[illegible]

大聖寺の城[illegible]金昌寺[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

食堂へ入[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

庭掃てやまぶき咲ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此一首にて物語の景あるべし

一雑事を物語りの八月の物語

[illegible]

九国天龍寺の住持[illegible]国

[illegible]又金沢の[illegible]

[illegible]

此[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

了ぬ今故郷にあらずして
おもふ西川は金陵郡
五十了山くに今永平寺に
了道元禅師の学び邦樹
如里を遶てうるはしく
此をのみの貴きゆへ
有しわ
福井八三里計なれとも久保

引のてあやしの中ふしなる
あらしのくるしかりしかの
なりしかくてくてくてくて
はくらくふくしくはくはく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

うく州て比那ゝとるあり
あそむつの稿をわりてこれ
の苗ゝ焼ゝ生ゝ
の門ゝとゝ
ゝ焼ゝ城ゝやゝ
ゝ沖ゝとゝ
あれつゝの
りゝ夜日ゝ

あすの夜しうゝゝ
ゝつゝ迷徐の
の後ゝ
ゝ
ゝ奉ゝ仲哀天皇の御
廟也社頭神ゝ
の間ゝ月の
の御ゝ

往昔聖武天皇の御世の上人大和
教起のゆかりとして建立
せし所の石なり泥濘を
こえて行くに法は其の教
ゆえに九州今にいたるまで神石
の如きものあれども
聖武の砂ずりとて亭を
のこすなり

月清し遥かに思ふ山の上
十六の童子の
面影
月は出る小国日向定め来
十六の童子
小貝ひろひ人と種の淡しを
もて海上七里あり天皇伊勢
さきの破籠小竹にて不

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て如行う歌ゝ入集ら所
りる前口又ふる思ふまま
まくらくに日ちとてこそいて後
世のものしりてつくく日
枝ひ思ひるさく流の初まと
くいやくやまくくも月
ゝりまの思く伊勢の辺宮
ちんまくよふくのかて

蛙のゆくみすり
わ花り歩く

此一書芭蕉翁より武陵石記
俳諧の根元なると風交発句の
おもしろ　なまりのいとゞ美しきを
送るゝ人に契りあつき一巻の記りとして
人毒の流行に夫婦の命はかなき
あれい白骨よりのしてたくさ世に
形さんるゝと回忌の祭り初り医
格者好の高下よ導てかとゝ海さ
辛ね

つ
藝賢之